学芸講座

松平左近―高松藩を救った英才―

2017/5/13
香川県立ミュージアム　御厨義道

はじめに
１　頼該と高松松平家当主
２　頼該の文化活動
３　幕末期の藩政参与
おわりに

はじめに
高松松平家
讃岐高松１２万石を治める、水戸徳川家の分家
松平頼該（まつだいら・よりかね）→本講座では「左近」で統一
文化 6 年 3 月 14 日、江戸小石川藩邸にて誕生
父：高松松平家 8 代当主頼儀、母：山崎綱子（蔦子）
幼名：隆之丞、道之助
通称：左近（天保 13 年～）
号：橘斎、橘舎、金岳、如水庵
慶応 4 年（明治元、1868）8 月 7 日没
左近の生きた時代（年表参照）
２度の幕政改革、対外状況の変化、幕末維新→江戸幕府の支配の動揺と終焉
高松藩主―8 代頼儀、9 代頼恕、10 代頼胤、11 代頼聰の４代を経験
左近評
「高松の俗習として往々無理な事を云ふ者を指して左近さんと称し、無理云ひの代名辞とする者がある」
（梶原竹軒著『金岳公子小伝・金岳公子著書集』、以下『小伝』）
「讃人疎狂（ひどい常識はずれ）自肆（わがまま）の徒を目して左近様と云へり」
（「贈正四位松平左近略伝」『増補高松藩記』所載、以下「略伝」）

１　左近と高松松平家当主
8 代藩主頼儀の世子選出―不遇な幼少期
正室に男子がなく、側室に男子 3 人
道之助（頼該）　文化 6 年（1809）生　母：山崎綱子（奥横目の家）
廉之助（頼顕）　文化 7 年生　母：池田ズイ
貞五郎（頼胤）　文化 7 年生　母：藤本時（大番組の家）
→年齢的には左近が世子となるのが順当（「筐底秘記」）
→頼儀は貞五郎を寵愛、世継とすることを強く望む
→長幼の序を無視した状況に藩内動揺―本家水戸家も心配する
大名家の当主―家中統合の象徴としての側面、実務能力の有無ではない
→水戸家出身の昶之助（後の頼恕）を養子に迎え世子（9 代当主候補）とする
（文化 12 年・1815）
―拮抗する 3 人の併存＋藩主頼儀への不安（資質、病身等）
→次代世子をめぐり奥向を含む勢力争いがあった可能性（「筐底秘記」）
道之助（7 歳）・廉之助は江戸から高松へ移住（文化 13 年・1816）

病弱を理由に幕府には届けず高松へ移住させる（「高松松平氏歴世年譜」）
頼儀、頼恕の嗣子（10 代当主候補）に貞五郎（頼胤）を幕府に請願（文政元年・1818）
―頼儀の独断
次代藩主であり、貞五郎の養父となる頼恕には事後報告（当時帰国中）（「筐底秘記」）
→道之助（左近の幼名）の当主就任の可能性はほぼ無くなる
藩主交代と左近の立場の変化
頼儀の隠居―8 代頼儀から 9 代頼恕へ（文政 4 年・1821）―左近 12 歳
道之助・廉之助の家紋決定（文政 5 年）
頼恕によって「瓶子」紋と「雪輪に三葵」紋の使用が認められる（「高松松平氏歴世年譜」）
→高松松平家の一族であることを表明することが認められる
頼恕、道之助に頼該、廉之助に頼顕の名を与える（文政 7 年）
頼恕の頼該・頼顕邸への訪問（文政 8 年、10 年）、金毘羅参詣同行（文政 11 年）
頼恕、道之助、廉之助に湯沐費 500 石を給付、邸宅を与える（文政 11 年）―左近 20 歳
頼恕の申請により藩主兄弟として公認（天保元年・1830）
道之助（左近）・廉之助（頼顕）二君、襄公ノ時羸弱(ﾙｲｼﾞｬｸ)ナルヲ以テ、敢テ幕府ニ告ケス、國ニ退隠セシム、公（頼恕）ニ至テ恒ニ之ヲ憐ム、是ノ歳幕府ニ請ヒ、其ノ健強ニ復セシヲ以テ族籍ニ列シ、公ノ弟トナス（「高松松平氏歴世年譜」）
→大名親族家として対幕府上公的な立場を獲得―公式な場で松平一族として活動が可能
左近（頼該）・頼顕に湯沐費 500 石、新邸宅の付与（天保 7 年・1836）
亀阜荘への転居→天保 10 年（1839）―左近 30 歳
頼胤の襲封（天保 13 年・1842）―左近 33 歳
頼胤による加増
道之助 2500 石、廉之助 2700 石が給される―家格の上昇（天保 13 年）
大久保家（家老家、藩主姻戚）3000 石、他の家老は 400 石～500 石
頼胤襲封直後―兄弟としての配慮と当主兄弟にふさわしい待遇の付与
頼胤の初入国―嘉永 3 年（1850）
長期にわたる在江戸
→左近に対する遠慮、左近藩主擁立の噂―×
→水戸徳川斉昭の蟄居（弘化元年・1844）―幕政に深く関与
左近の立場の変遷
頼儀期―非公式な存在（異常な世子決定）
頼恕期―公式な立場を得る（世子決定の決着と世代交代）
頼胤期―親族家として高い家格を得る

2　左近の文化活動

遊坂出墾田記（『読み下し聞くままの記　百七話』（高松市図書館発行）所収）
坂出墾田―坂出に開かれた大規模塩田。久米通賢の建策を頼恕が採用し実施、文政 12 年完成
頼恕の政策と政治努力を称賛、久米をはじめとする工事関係者の慰労を内容とする漢詩
頼該は当初開発事業の成功に懐疑的
「余これを聞きて笑い去れり」「余の猥りに笑言を発せしを愧ず」
→完成に驚嘆、現地を訪れ作詩「余始めて前土人の言果の虚ならざるに驚き」
→坂出開発に反対意見あったことをふまえた内容
＝藩論の統一に作用←左近が懐疑的であったことを表明することで反対派の立場を保護
左近の動向―詩の冒頭
「我州佳き山水多く、而して綾郡最たり。余少より好んでこれに遊ぶ。（中略）およそ耳に聞く所いまだかつて目見えざらず。以て是郡の勝為る概ね皆我之を窮む。」
→幼少より領内散策を実施、阿野郡の主要地は全踏破
→瀬居島・乃生崎御殿の来訪
→領内把握が目的―左近の存在・役割を考える上で注目

新建大聖廟記（天保5年・1834）
　藩校「講道館」における孔子廟の完成記念→作詩後、石碑となる
　　聖廟の建設を讃えると同時に、坂出塩田や永富池の築造などの事業を讃える
　学才を活かした高松藩政の政治宣伝
　→一族の左近による事業の意義の確認
　→十分な学識を有して初めて機能＝左近の能力の高さ
坂出塩田開発（財政再建）・大聖廟建立（学問振興）―頼恕の重要政策
　→芸文活動の側面から政策を支援する左近
画業
　「石清尾祭礼図巻」
　　高松城下の氏神である石清尾宮の祭礼行列を描いた作品
　　祭に参加する市井の人々の表情やしぐさを生き生きと描写
　　→実地観察の上で作画
芝居への高い関心
　「内陣乃鏡」
　　芝居の舞台裏を挿図入りで説明
仏教活動
　若い時期からさまざまな宗教・哲学遍歴→「美艸録」（『小伝』所収）として執筆
　　神道、儒教、老荘思想、浄土宗、真言宗、禅宗、一向専宗、日蓮法華宗
　幼年時（5歳ごろ）に感じた「無常心」を出発点→人生・社会への思索
　　お付の者瀧との会話（夕暮れ時）
　　頼該「あの世といふ事はどふしたことぞ」瀧「世と申す事は、世の中のことにてやはりこうして居るのが世にて候」頼該「そんなら、日が暮れたれば何といふぞ」瀧「世で候らへば、今夜も明日も、やはり世にて候」余是を聞きて、心にさあらば世といふものは色々移りゆきて、じつとしては居ぬものさうなと、思へばいよいよ何とかたよりないやうで、心ぼそうなり、瀧が背にうつぶして泣けり（「美艸録」）
　　「その後この心わすれやらす、成長に従ひて、増こそすれ衰ふことなく、物にふれては、此一念うかみいで、気をふさぐこと多かりし」（同上）
　法華経第五品勧持品と日蓮の生涯の符合に驚嘆
　　「法華経を所々訓読して見けるに、第五の巻、勧持品の偈に至り、心根に徹したる事あり」（「美艸録」）
　　「余この文に驚ておもへらく、先年日蓮聖人の御一代記を一覧したるに、この経文に甚だ符合せる様なり、不思議なる事かなと」（同上）
　　「実にこの勧持品の廿行の偈は、日蓮上人の未来記と云つべし」（同上）
　　→この宗教体験を契機に法華経へ入信（天保9年・1838）――左近29歳
　　←母綱子の影響、本能寺・日顗(ﾆﾁｷﾞｮｳ)の教導
　　法華宗を認知していたが、関心は低かった
　　「ただ法華宗といふものは、かたくなはしき（頑なな、頑迷な）宗旨なりとのみ思ひ居たり」（「美艸録」）
　多数の法華宗関連の著述
　　美艸録※、仏道独案内※、神道問答鈔※、蟻の譬話※、貳門諫暁鈔、妙法の利剣※、高須賀御答辞※、本因元始録、備後状、初心法華演説録、児女のさとし※、矢上状、旅窓述志録※
　　※の付いた著作は『小伝』所収
　法華曼荼羅（本尊）などを作成・配布
　　俗体の身分で作成
　　嘉永元年（1848）～慶応4年（1868）の21年間で4,459幅を作成（17～18幅/月）「本尊授与人別帳」
　独特の思想
　　「御杢馬記」（嘉永2年4月26日～27日、本妙寺にて説法）

説法のための「高座」を「杢馬」と呼び、上総（馬具の一種）を掛ける
在俗、武家の立場からの布教・説法―左近としては「話・講釈」
←左近への批判を生む
「…小子も年来法華経之事にて世上に悪口のみ申され通し居候処…」（松平左近書状、文久 3 年 5 月 18 日付、香川正順宛『小伝』所収）
熱心な信仰
←「悟り」を求めるというより、社会安定・現状解決の手段としての捉え方

3　幕末期の藩政参与

高松藩
徳川将軍家の親族大名
溜詰―大名家で最高の席次、幕政に関わる立場（彦根井伊家、会津松平家）
幕末の政局
ペリー来航を契機とする外交政策をめぐる対立（鎖国か開国か）
将軍継嗣問題（家茂か慶喜か）
→政治の主導権を巡る対立（幕府か朝廷か）
→　佐幕開国　ＶＳ　尊王攘夷
→　勤王倒幕運動へと変化
高松藩の立場
水戸家との対立
水戸家当主徳川斉昭の蟄居→高松藩はその後の後見役―斉昭派の反発
大老井伊直弼を補佐する立場
溜詰大名として事態の調整にあたる
無勅許開国もやむなし→尊王攘夷派から敵対視
桜田門外の変
安政の大獄による尊王攘夷派弾圧
→桜田門外の変（万延元年）―尊王攘夷派による大老井伊直弼暗殺
政情の転換―朝廷を中心とした攘夷推進
高松藩主 10 代頼胤謹慎の後隠居、11 代頼聰襲封（文久元年）
→若い当主(28 歳)を補佐する存在として左近(53 歳)が浮上
→尊王攘夷派が台頭する政局中、藩の存続上、左近の存在が重要
左近の政務関与
藩主とともに上京、政治活動（文久 3 年）
→朝廷からの中啓拝領
海岸防禦に関する詔勅
藩主頼聰に海岸防禦について左近に相談すべし
3500 石に加増
→勤王派として活動、内外の志士と交流―政治の中枢に参画
左近の勤王思想
法華宗と結び付いた勤王
天保 10 年、法華経に祈願、朝恩報謝のため「宝祚永久国家安全」の祈祷を執行
←法華経は天下国家の祈祷となるもの、という認識
―嘉永 6 年のペリー来航より 10 年以上早い段階で尊王・勤王の意思を表明
―法華宗との関わりが特徴的かつ独創的
法華宗布教と勤王思想の普及
「左近様法華」―「頼該の教えを聴く者は童幼婦女子といえども皆天子に忠を尽すべきことを知る」(「略伝」)
「天朝の御為に水火を赴き候も厭ひ申さざる鉄石の義徒を集め置き候えば、恐れながら何かの御為と存じ奉り、只今法華信者の名目にて連判帳に記し置き候は、去る嘉永元

戊申年より当癸亥（文久 3 年）迄都合二千五百余人御座候」（坊城俊克との談話、「略伝」所載）

「…有信同志の輩に密々その趣を告知し祈誓の助力を相頼み、講毎に祝牌一位相渡し置き申し候、右講年々繁栄仕、花洛を初め大津・大坂・兵庫・尼ヶ崎・和州・作州・駿州・予州・阿淡・三備・防長にも相及び、老弱男女同心に勤行助力相励み罷り在り候次第に御座候」（坊城俊克との談話、『小伝』所載）

法華経からの情勢把握

「近年天下の形勢一方ならざる趣に相窺われ候、この義も法華経に深き仔細これあり候由、先達の註釈に相見え申し候、臣頼該凡愚に候えども、右註釈の明鏡によって聊か早く時勢の変動を察しあり…」（朝廷への上奏、「略伝」所載）

法華経による社会安定

元寇を予言した「立正安国論」を手本とし、法華宗をもとにして社会を安定させることを主張（「旅窓述志録」）

高松藩朝敵事件における左近―高松藩を救う―

将軍徳川慶喜の大政奉還→鳥羽・伏見の戦い（新政府軍←→旧幕府軍）

高松藩―幕府側として戦闘に参加

→会津藩・桑名藩などとともに「朝敵」とされる

→土佐藩・丸亀藩等の討伐軍（新政府軍）、高松入―官職剥奪・城地没収

新政府軍からの恭順条件―鳥羽・伏見の戦いで軍を指揮した家老 2 名の首級提出

→交戦か恭順かで藩内対立

→左近の発言により恭順決定

恭順条件をもたらした藤澤南岳を処罰しようとする家老に「まず左近の首を刎ねよ」と叱声

家老の処罰と恭順

小夫兵庫　43 歳

小河又右衛門　28 歳

→２名の首を討伐軍に提出

→高松藩の「朝敵」赦免―官職復帰・城地再給（慶応 4[明治元]年 2 月 15 日）

左近の意見と二人の犠牲が高松藩を戦火から救う

（参考）会津藩

おわりに

頼該歿（慶応 4[明治元]年 8 月 6 日）

高松藩主の長子として生まれながらも、特異な立場に立つ

→独特の立場で思想や人脈を構築

→才能や能力に対する信頼を蓄積

→政治権力の周縁から中枢へ

→身の上に対する屈折した想い

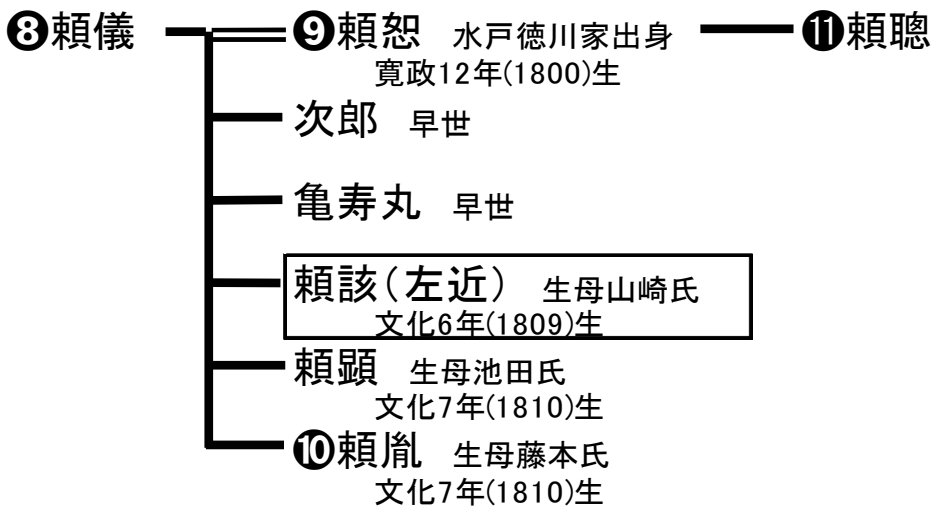
「到底日陰者の身の上、公然勤王の大義打出申候は叶ひ不申」（坊城俊克との問答「略伝」）

俗習としての「左近さん」

→藩内の少数派―強硬な意見・行動をとらざるを得なかった立場、屈折した想い

→「左近さん」が通じることの意味―城下に広く知られた存在

松平左近の時代

元号	西暦	月	事項	左近年齢
天明7年	1787	7	寛政改革開始	
寛政4年	1792	9	ロシア使節ラクスマン来日	
		12	尊号一件	
寛政5年	1793	7	松平定信、老中辞職	
文化元年	1804	9	ロシア使節レザノフ来日	
文化6年	1809	3	左近誕生	0
文化12年	1815		昶之助(頼恕)が頼儀嗣子となる	6
文政元年	1818		8代頼儀、頼恕の嗣子に貞五郎(頼胤)を請願	9
文政4年	1821	5	8代頼儀隠居、9代頼恕襲封	12
文政8年	1825	1	異国船打払令	16
天保8年	1837	6	モリソン号事件	28
天保10年	1839	11	アヘン戦争勃発	30
天保12年	1841	5	天保改革開始	32
天保13年	1842	4	10代頼胤襲封	33
		7	薪水給与令	
		8	南京条約締結(アヘン戦争終結)	
			左近を名乗る	
嘉永6年	1853	6	ペリー来航	44
安政元年	1854	3	日米和親条約締結	45
安政4年	1855	4	高松藩、大坂木津川台場警備を命じられる	46
安政5年	1858	6	日米修好通商条約締結	49
		9	安政の大獄始まる	
万延元年	1860	3	桜田門外の変	51
文久元年	1861	7	11代頼聰襲封	52
文久2年	1862	11	幕府、攘夷の勅旨に従うことを決定	53
文久3年	1863	2	左近、上京	54
		3	将軍家茂上洛	
		8	8月18日の政変	
元治元年	1864	7	第一次長州戦争	55
慶応元年	1865	5	第二次長州戦争	56
慶応3年	1867	10	大政奉還	58
明治元年	1868	1	鳥羽伏見の戦い	59
		8	左近没	

左近と高松松平家当主の関係